元論の解説やひいては最終的な二つのパラダイムで、一九三九年発表の「平常底」と一九四五年の「逆対応」の解析においてさえも仏教用語、仏教教義に頼るようになった。西田独自の用語は他の哲学よりもむしろ仏教哲学のほうが、より近いことを暗示するように思えるのである。

道元の「心身脱落」と西田の「一と多の絶対矛盾的自己同一」として考えられた「矛盾的自己同一」とはかなり違っていることは言うまでもないが、「心身脱落」が迷いと悟りの二元論を脱構築するものであるように、「矛盾的自己同一」も一と多の二元論を脱構築するものであると言ってよい。

一は世界平和を、多は各国の独立個人の公正を概念に表す。世界平和を達したり、各々の人間の独立が認められたりするとき、一即多という概念を具体化させていったと言つてよい。同様に、一即多の哲学は世界平和でありながら他方、人間の独立が認める状態への図式にもなる。なぜなら、人間の神髄は一般的な人間性と各々の個性性を含んでいる。

もちろん、道元の救済論とその動機は西田や務台とは全く違うものである。しかし、務台は人類ヒューマニズムの概念を提示し、道元はその世界人間の坐禅によつて、可能性を示していると言えり。

中国語圏における道元の発見

何 燕生

道元はかつて中国に留学し、中国の仏教と深いかわりを持つているが、中国ではその存在が殆ど知られていない。しかし、近年、そのような状況に一つの変化が見られるようになってきた。それは、台湾を中心とする中国語圏で道元の書物を読んだり、道元の強調するところの「只管打坐」を標榜し、それを実践の中に取り組んだりするような試みが一部のグループによつて行われていること、また、台湾および大陸の学界で中国語で書かれた道元研究関連の書物や論文が次第に見られるようになってきたということである。これまで調べてきたところによると、前者は実践レベルから道元の坐禅観を取り入れようとしているのに対して、後者の場合は思想レベルから道元の禅思想を発見しようという特徴を持つているように思われる。欧米において、道元の思想に共鳴して、坐禅を行っている団体や個人が多いが、管見によると、中国語圏ではそのような例がこれまでには未だ確認されていない。

実践レベルからの道元の発見とは、台湾出身の洪文亮医師を導師とする一連の活動を指す。道元を「発見」したのは、氏が日本を訪問したとき、日本曹洞宗の原田雪溪氏との出会いがきっかけだったという。原田氏の印可を受けると共に、曹洞宗の門徒という立場に立ち、道元の『正法眼蔵』を研究したり、道

パネル

元の強調する「只管打坐」を「正伝の仏法」とし、それを人々に広めようということとなった。その活動は、講演活動、坐禅会、インターネットというおおよそ二つの形で展開されている。勉強の内容はこれまで主として中国語に翻訳された道元の『正法眼蔵』を読むことだが、「坐禅箴」巻、「自受用三昧」巻、「普勧坐禅儀」、「学道用心集」などの他、瑩山禅師の『伝光録』が日常的に読まれているようである。構成員は在家者で、仕事の合間に活動に参加している人が多い。メンバーの殆どは台湾本島出身者であるが、マレーシアやシンガポールなど東南アジアの華僑も含まれている。全体の人数は不明だが、活動の規模からすれば、恐らく百人前後と思われる。洪氏本人が在家でありながら、自分は日本曹洞宗の法脈を受け継いだ台湾の第一人者との認識を持つ一方、弟子たちより「老師」「禅師」などと呼ばれ、宗教家としてのイメージも多分に持っている。準宗教の性格を持つていることが窺える。

思想レベルからの道元の発見とは、具体的に傳偉勲氏の『道元』を指す。本書は実は中国語圏における最初の本格的な道元研究である。本書における傳氏の問題関心は、道元の思想そのものにある。本書の核心部分となる第四章「道元禅学の現代的理解」で取り上げられているテーマは、「修証」等や「有時」の時間論、出家重視の思想、因果の問題、禅戒一致の思想などであり、氏はそれらをインド以来の仏教思想の流れに位置づけながら、氏自身が構想する「創造的解釈学」／creative hermeneuticsという立場に立って、論を展開している。氏は道元の「誤読」にも特別な関心を示し、それを「創造的な誤読」「意

図的な誤読」などとし、自分自身の構想する「創造的解釈学」とも近いものと強調する。第五章「道元禅学の現代的意義」では具体的に「道元と京都哲学派」「道元と批判仏教」「道元とハイデガー」「道元とクリシラムルティ」が論じられている。中国大陸における道元研究の本格的な成果は、現在のところ、私が企画した『中国禅学』第四巻の特集号「道元と中国禅」という程度のものである。まだ端緒にすぎたばかりではあるが、重要な一歩だと思っている。

パネルの主旨とまとめ

何 燕 生

そもそも近現代における禅の受容はある意味では思想としての発見だったといえる。中国の胡適による一連の禅研究はそのような方向であったし、西田幾多郎などいわゆる京都学派の哲学者たちの諸言説や禅者・鈴木大拙の取り組みも例外ではなかったと思われる。そうした中、和辻哲郎の『沙門道元』や田辺元の『正法眼蔵の哲学私観』からでも明らかのように、道元の思想が極めて大きな存在だったが、これまでそれを学問的に検討することが少なかった。本パネルは、そのような見地に立ち、また今大会の共通テーマである「思想としての宗教」に沿いつつ、思想としての道元禅を探ってみようというものである。